

担当者：長谷洋一

在外日本美術コレクションの歴史と動向

在外日本美術コレクションの歴史は日本美術品流出の歴史でもあり、4期に分けることができる。1期は南蛮貿易・日蘭貿易による南蛮漆器や伊万里焼の輸出やシーボルトによる日用品、美術品、模型、植物標本、といった幅広い資料群。前者は輸出品として、後者は鎖国中の日本理解のための情報収集として利用された。2期は日本の近代化と廃仏毀釈に伴う浮世絵と仏教美術などの流出である。仏像や絵画は専ら岡倉天心・フェノロサらによって価値が見出された作品である。浮世絵の流出は、日本では古い不用品としての扱いながら、ヨーロッパではその価値が認められ、その流出には起立工商会社出身の若井兼三郎・林忠正が大きく関与している。19世紀末には日本から浮世絵は払底した半面、林は日本へのフランス近代絵画輸入にも関わっている。3期は茶器に不向きな中国陶磁器を繭山龍泉堂が扱う一方で、山中商会が関東大震災・金融恐慌で疲弊した寺院や旧大名家からの諸道具を扱い、ニューヨーク、ロンドン支店などが活躍の舞台となった。4期は戦後で、混乱期にアメリカ将校らによって秘蔵されていた美術品が売買され、またその後はそれまで日本美術史研究の俎上にはなかった美術作品が見出されて在外へ流出していく。